# 発達障害児童の会話ログを用いたSRL分析システム（正式版）

## 1. システム概要と理論的背景

目的: 発達障害児童の日常会話データから自己調整学習（SRL）のプロセスを抽出・評価し、支援スタッフに理解しやすい形でフィードバックを提供する。

理論的基盤: Zimmermanの3フェーズモデル、SRL-Sルーブリック、マイクロアナリシス手法、感情調整研究。数値は便宜的スケールであり絶対評価ではない。

## 2. プロンプト設計と理論的根拠

単回分析: 会話からPLAN, MON, EVAL, STRAT, NEXT, TRANSFER, AFFECTを抽出。SRL-Sルーブリック準拠で0-3段階評価。

複数回分析: DBに保存された単回結果をもとに30回固定で推移分析。平均、zスコア、傾向語句を生成。

言い換え辞書: 専門用語を平易表現に変換（例: overall\_srl→日常の調子）。

## 3. 処理プロセス

単回分析: 発話抽出→要素検出→スコア付与→引用保存→スタッフ要約。

複数回分析: 単回結果の蓄積→推移解析→今日の位置づけ→スタッフ向け出力。

## 4. 出力仕様

スタッフ向け表示例:  
【今日の様子】 状態:返答が短め メモ:図を使った取り組みが見られた 引用:「前回それでうまくいった」  
【1か月の中で見た今日】 日常の調子:少し良い方向 やり方の転用:似た場面で使えている

## 5. 理論的整合性と限界

整合性: SRL主要フェーズと実装要素が対応。

限界: 発話依存・発達段階影響・会話分析単独の制約。対策: ダブルコーディング、ルーブリック改訂公開、マルチメソッド統合準備。

## 6. 期待される効果

客観性の補強、変化の可視化、介入の適正化、知見蓄積。

## 7. 注記

数値は物差しであり絶対評価ではない。引用と要約が一次情報。生活調子モードにより日常支援に即した表現に変換。